
魔王が生まれて殺されるまで。

槻由塚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王が生まれて殺されるまで。

【Nコード】

N6072Z

【作者名】

槻由塚

【あらすじ】

自分自身に関する記憶をほとんど消失してしまった異世界人の「俺」は、とある事情により自身の経歴を偽って国内有数の学校に入学する。しかしある日実習中の事故によって中篇くらいの魔法ファンタジー。

なおこの小説は主人公が最強だったりしますが主人公が活躍することとは余りありません、ご容赦ください。

プロローグ

遥貴が死んだ。そして幼なじみが殺人と監禁容疑で捕まった。俺が気づいたときにはすべてが終わっていて春になっていた。

きっかけはたしか、進学先を幼なじみの三春が進学する大学を蹴って遥貴と同じ大学にするという話をした時だったと思う。

そのまま三春が遥貴の心臓をザクツと刺して、その場の惨状に恥ずかしながら気絶した俺はあっさりと三春の部屋に運ばれ監禁されていた。

一人暮らし用の部屋をすでに借りていて、年明けから何故か2DKのその部屋に住んでいた三春の部屋に監禁されてから警察が三春を捕まえるまで三ヶ月。俺が他人と会話できるまでになるまでに半年と少し。

さらに怪我の治療やらなんやら。全てが落ち着いた頃にはだいたい一年くらいがたっていた。

三春によって監禁されていた時期のことを俺はほとんど覚えていない。

どうやら脳味噌の側が思い出すことを拒否してしまっているらしく、よっぽどひどいことをされていたのではないかという推測しかない。

ただ、臆気ながらに思い出せることから俺は自分が所謂「調教」と呼ばれることをされていた、ということだけは分かった。恐らく

それは性的なものも含まれていて、事実事件前は人並み程度にあつたはずの性欲はほぼ皆無。とくに女性という性別の人間には恐怖しか抱けなくなっていた。

全人類のだいたい半分は女性だ。そんな俺がまともに生活を送れる訳がない。部屋に引きこもって、そして俺は死のうと思つた。

人のほとんどいない夜中、月明かりに照らされた桜の薄い白を眺めながら本当なら一年前にあの三人でこれを見ていたはずだったのに、と思つと頬を伝うものは止められない。

春は二人の季節だ。遥貴と、三春。二人の名前にはハルがあつた。そしてあの事件のきっかけの一つにも。

幼なじみの三春は多分、俺に好意を寄せていたのだと思う。昔から世話焼きの三春はそのうち「世話焼き」から逸脱した次元まで俺を管理し始めた。

勝手に俺の部屋に入って盗聴器をしかけたり、俺に好きな人が出来たら嫌がらせをしてそれを「俺の指示」だと噂を立てて嫌わせる。

バレンタインのチョコレートには血と爪と陰毛が入っていたし、夜中になれば他人を強姦しようとする。朝起きたら九割九分九厘俺の部屋にいて性欲を処理していた。そのせいか、当時の俺の好みは何も知らなそうなウブな子だったと思う。

そんな幼なじみの異常性はわかつていたが、自分がいないとさらにおかしくなってしまうんじゃないかと思つて友人付き合いを続けていた。

色々な噂を立てられたせいで友人がいなかった俺の唯一の友人、それが遥貴だった。

遥貴は口下手ではあったが人の話を聞くことが上手で、俺の話をいつも聞いてくれた。他の人の前では俺に虐げられながらも純粋に彼を思っている、だから……といった雰囲気です。純粋なヒロインを気取っている三春の異常性を理解してくれる人間であり、俺が学校内で唯一信頼した人間だった。

遥貴がいなければもつと以前に俺は誘拐監禁されていただろう。二人きりになつたら危ないということでも一緒に出かけてくれたし、食事に得体の知れない白い粉末が混入する事件も防がれた。

こんな幼なじみがそばにいたら恋愛が出来るわけもなく、別の大学へ行くために必死な努力をした。元々成績が優秀だった遥貴と共に国内でもトップクラスの国立大学へ進学すればいくら三春でも簡単に追いかけてはこない。

そしてそれをきっかけに上京して、一人暮らしをすれば逃げられるだろうし三春も閉鎖的な世界から逃げ出せるだろう……というのが遥貴の案であった。遥貴と同じ大学を目指したのは単純に俺が国内でもトップクラスの大学と聞いて遥貴と同じ大学しか浮かばなかっただけで、別に俺に同性愛の気があつたわけじゃあない。

ただ、遥貴と同じ大学に進んだせいで、遥貴は殺された。それは否定できない事実だ。

桜並木を抜け、人の姿がちらほら見える踏切まで歩く。たしかそろそろ終電がこの踏切を通る時間だ。血縁はおらず隣の三春の家に引き取られていたのだ、最期ぐらい報復をしてもいいだろう。三春

の異常行動を見ない振りをしてきた親だ。少しは申しわけない気もするが、彼らは俺のせいで三春が捕まったのだとのたまっている。よく考えてみたら別に愛情もなにもなかった。

俺のせいで帰宅が遅れる方、本当に申し訳ない。

むしろこっちの思いの方が強かった。踏切が閉まり、列車が来る音と、明かりが見えた。

ああ、きつと地獄にでも行くんだろっちなあ。そんなことを考えながら俺は死んだ。

これが、俺が覚えているすべてのことである。そして、俺は今までに思い出せていない大事なことがある。

俺の名前と、俺の姿。どっちも俺は思い出せていない。そしてそのまま俺はおかしくなっている。

ハルへ。

俺は罪を償えたのだろうか。

そして、ハルは俺を覚えてくれていたのだろうか。

今となっては確かめるすべはないけれど、俺の全ての意志が変わらないうちにこの手記を残しておく。

この迷いが消えたとき、俺はもう俺の姿と考え方を持った違う生き物になっているだろう。

この手記をおまえが読むのはすべてが終わった後かもしれない。もしハルが全てを終えて俺を殺していたとしても、ハルは何も悪いことをしていない。

俺は魔王になったのだから。

人を殺して、人を操って、人を喰らう欲望。それにあらがうことがもうできなくなってしまったのだから。

ハルは幸せになってくれ。俺の最期の望みはハルが幸せな国をここに作ることだから。そのために俺は祝福を贈ろう。救国の英雄に誰よりも早く。

救世の英雄ロータス・スヴェリングス。汝に光り輝く神の祝福があらんことを。

(魔王城址付近、失意の谷より発見された『魔王ヴァルヘライトの手記』最終項“ハルへの手紙”より引用)

入学式1

フエイロウ皇国第二の都市 学術都市トリスメイギスは常にぎわっているが、今日は特に浮かれた雰囲気が漂っていた。都市中心部から1キルメイトほど離れた場所にある皇立トリス魔法学校、その入学式が今日執り行われるのだ。

俺の知っている「一般的」な学校は国が幼少時から管理している強制教育……じゃなかった、義務教育で九年間の教育が行われている。そしてその後三年間の中等教育の「続き」と大学という高等教育の場が提供されており、ほとんどの学生が高校へゆき、高校生の五割以上が大学へと進学する。

しかし、この世界で国が提供している教育というのは俺の知っているものとはずいぶん違う形式だった。

年齢で入学年数を区切るといふ文化がほとんど存在せず、「言葉がしゃべれるくらい、勉強できるくらいになったら最低限の学習」程度で、学校に通うのは本当に学者を目指す人か、学校で学びたいものがある人間だけだ。

いろいろな学校がこの街以外にもあるが、特にトリス魔法学校を志す人間が目指すものは「傭兵、もしくは軍部」と言われている。

この世界において軍部、傭兵、冒険者という人間たちは必要不可欠な存在だ。街の外に棲む魔獣を討伐するためには専門の知識や技術を持つ人間ではないと大きな危険を伴う。

数ある学校の中でも名門で知られるこの学校の卒業生であればこの街を含む大都市や皇国軍部での幹部候補生になれるし、傭兵としても箔がつく。冒険者をやるとしても軍幹部候補にコネクションがあるということはそれだけでもすばらしいアドバンテージとなる。

そんな学校に簡単に入学できるわけはなく、俺がこの学校に入学するまで二年ほどの時間を要した。

学校に入学するための「資金」「戸籍」の用意、冒険者ギルド内での一年間の研修、試験。それに加えて俺自身の間人恐怖症の（ある程度の）克服。主に最後の件が長引いた結果だが、その間に俺も学校にはいるまでに学ばなければならぬものを学ばせてもらった。

この国の情勢、魔獣の発生原理、魔法の簡単な仕組みと使い方、戦い方。すべてを知らない俺にそれをたたき込んでくれたのはこの街にある冒険者ギルドのマスター、アングさんだった。

「坊^{ほん}もいよいよ学校行きか……俺も何だか感慨深いぜ」

アングさんが呵々と笑う声が薄暗い部屋に響く。

石造りの大きな建物、その半地下になっている場所が俺、そしてアングさんの住居だった。アングさんは唯一俺の正体を知っている人だ。ギルドマスターになってからおおよそ百年ほど経っている虎系の亜人で、かつては結構有名な傭兵だったらしい。しかし、子供と妻を戦火で亡くしてからは結婚もせずこのギルドでひたすら働いているという。

精悍な顔立ちはまだ四十代半ばにしか見えないが、その身には百年以上の経験と知識が詰まっている。褐色の体は筋肉で覆われ、白

銀の髪と榛色の瞳は爛々と輝く。

「坊、って呼び方は恥ずかしいです。確かに今の見た目は子供ですがこれでも俺だって大人ですよ?」

「ハハ、十歳も二十歳も坊が坊主なのに違いはねえさ。それより、荷物はちゃんと持ったか? あと小遣いは一日300ウイーまでだぞ」

「当然です、あと三百ウイーは子供のおやつ金額でしょう! まったくアンゴさんは」

アンゴさんが俺を子供扱いしてからかう理由の一つに、俺の外見がある。亜人も人間も本来は年齢経過で年をとるのだが、俺はそれから二つとは違う生物のため、ある程度自由に外見年齢を操作することができる。

最近までは精神的な意味での年相応、二十代半ばの青年の姿で活動していたのだが、その姿で学校に通う場合いろいろな意味で人から浮いてしまう要因が多かったため、極端なくらいに幼い姿……十歳前後の少年のそれで学校に通うことにしたのだ。

本当は街中で暮らしているので寮に住む必要はないのだが、アンゴさんと共に組んだ俺のリハビリメニューの最後として三年間の寮での生活が盛り込まれたのだ。

「まあ、学校の生徒は毎年九割九分が男共だ、坊が女性恐怖症でも心配はいらんだろ」

「そうですね、本当にアンゴさんに出会えたことに感謝いたします」

アンゴさんに促され、暫くは座れないだろう食卓につく。部屋と同じく石でできた食卓には米に似た穀物、ライテを挽いたバケツのようなものがひとつ、そしてこの地域の人なら大抵家で飼育しているシエリア鶏の卵で作った目玉焼きだ。

標準的な家庭の朝ご飯ではあるが、アンゴさんの焼いた、ちょっと焦げている目玉焼きがしばらく食べられないのはいささか残念である。

「坊、書類上ではお前の希望通り亜人で通してある。お前さんの正体がばれたら真っ先に俺に連絡しろ、いいな？」

「はい、アンゴさん……いえ、師匠」

パンを食べる手を止め、俺は肯いた。今までの生活はアンさんという理解者の下であったが、今日からは違う。この二年の間で作りに出してきた亜人「ヘンリー・ヴァイリツへ」として生きていくのだ。

食事を終え、俺は席を立つ。傍らに用意した荷物は教科書と少しばかりの私服、そして偽装用の隠蔽魔術を籠めた銀の指輪だけである。ドアの前に立った俺は一旦荷物を置くとアンゴさんの方を向き、膝をつく。

「ヴァルへ、これより行って参ります」

「……気をつけるよ、坊」

俺は荷物を手に取り、半地下の空間から外へ出ると郊外の学校へと向かう。背中越しに聞こえたアンゴさんの声はいつも通りだった。

魔法を学ぶ学校とて、無駄に大きいなどということはない。演習用に広い土地を有してはいるものの、選ばれた人間のみが通う学校の校舎はシンプルで、少し古くさかった。その校舎からおよそ半キルメートルほど街から離れた場所に学校所有の学生寮は存在した。

学生寮を利用する学生は全校生徒のおよそ三割、百人程度だ。

そこまで大きいわけでもないこの学生寮は二人部屋が四十五、一人部屋が二十あり、ほとんどの人間が男女の区別なく二人部屋に放り込まれる。

もちろんそれは俺も同じであり、一学年に女子が二人いるかいないかという学校でなければこのようなデンジャラスな寮制度は利用せず、アンゴさんの家から通っていたらう。

「新入生の方でしょうか？」

背後からかけられた声に、思わず振り向く。見れば、背の高い丸眼鏡の男性が箸を片手にこちらを向いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6072z/>

魔王が生まれて殺されるまで。

2011年12月22日23時57分発行